

信念とヴィジョンの証 ——ケネディ大統領による二つの「月」演説の分析——

青砥 吉隆

I. はじめに⁽¹⁾

1957 年 10 月 4 日、ソヴィエト連邦によって世界初となる人工衛星「スプートニク 1 号（Спутник-1: Sputnik 1）」が打ち上げられた。その翌日、10 月 5 日付の『ニューヨーク・タイムズ（*New York Times*）』紙は、開戦を報じる時にのみ用いられる六段抜きの大見出しを掲げ、打ち上げを大きく取り上げた。紙面では、スプートニク 1 号がアメリカが計画中であった人工衛星の 8 倍もの重量であることや、その飛行高度と軌道、さらに発せられた電波の周波数までもが詳細に報じられた⁽²⁾。

また、当時広く読まれていた『ライフ（*Life*）』誌は、1957 年 10 月 21 日号において、13 人の専門家へのインタビューで構成された「なぜアメリカは競争に負けたのか」という特集を組んだ。そこで彼らは、合衆国政府の宇宙開発政策の先見性のなさを非難し、ソヴィエトがアメリカよりも強力なロケットを有したことは、大陸間弾道弾（Intercontinental Ballistic Missile: ICBM）の開発においてもアメリカに先行していることを意味していると指摘した⁽³⁾。これらの記事からは、スプートニク 1 号の成功によってソヴィエトがアメリカよりも先に ICBM を完成させてしまう可能性に対し、合衆国国民が強い危機感を抱いたことが窺い知れる。事実、「スプートニク危機（Sputnik crisis）」は、真珠湾攻撃と比されることも稀ではない⁽⁴⁾。

その後も、アメリカは人工衛星のみならず、金星探査や月探査などにおいてもソヴィエトの後塵を押し続ける。そして、1961 年 4 月 12 日のユーリ・ガガーリンによる世界初の有人宇宙飛行によって、ソヴィエトの宇宙における優位は決定

的となった。1961年4月12日付の『ニューヨーク・タイムズ』紙は、第一面の最上段、全幅を用いて「ソヴィエト、有人飛行に成功。地球周回中にパイロットは『気分良好』と報告」と、三行にわたるヘッドラインを構成し、それまでの宇宙開発におけるソヴィエトの功績を写真付で特集した⁽⁵⁾。翌日の同紙では、あるイギリスの科学者が「ソヴィエトの科学・技術はアメリカより約三年は先行している」とコメントしている⁽⁶⁾。ソヴィエト共産党中央委員会は、ガガーリンの飛行を「ソヴィエト人民の才覚と社会主義の力を体現している」と評した⁽⁷⁾。

この歴史的なガガーリンによる飛行を受け、ジョン・F・ケネディ大統領は副大統領リンドン・B・ジョンソンに、アメリカがこれまでの宇宙計画において遅れをとり続けた原因と、今後合衆国が目指すべき宇宙計画についてまとめるように指示し、アメリカ航空宇宙局（National Aeronautics and Space Administration: NASA）の助言の下、4月28日にジョンソンからケネディに向けたメモが作成された。そこには、アメリカが世界においてリーダーシップを示すにはどのような計画が最も効果的なのかということをはっきりと示す、極めて現実的な政治判断が示されていた。「他の国がいかに我々の理想主義的な価値に感謝しようとも、彼らは長期的な目で見た際の勝者の側につく傾向があるということを認識すべきだ⁽⁸⁾」と、ジョンソンは強い口調で警告した。

このメモを受け、ケネディは1961年5月25日に特別議会演説を行った。彼は、1960年代が終わる前に宇宙飛行士を月面に送り彼らが無事に帰還させると宣言し、議会は万雷の拍手でこれを迎えた。この有人月面着陸計画は、その後アポロ計画（Apollo Program）と名付けられた。さらにアポロ計画開始後の1962年9月12日には、テキサス州ライス大学でアポロ計画についての一般向け演説を行い、聴衆からの大きな反響と賛同を得た。

アポロ計画は、当時の金額で240億ドル、現在の金額で1,600億ドル相当もの予算を元に、1961年から1972年にかけて実行された⁽⁹⁾。だが、膨大な軍事費が必要とされた冷戦期において立案、計画、承認されたにもかかわらず、アポロ計画にはさしたる軍事的効果が伴わなかったことは注目に値する。ICBMなどのミ

サイルの開発に必要なのは、原水爆などの搭載物を正確に目標の大陸に到達させることであり、その開発実験には人工衛星の地球周回軌道への打ち上げ高度や速度などの精度を高めることで基本的には事足りる。だが、アポロ計画は人工衛星打ち上げを目指した「オービター計画（Project Orbiter）」や有人地球周回飛行の「マーキュリー計画（Project Mercury）」等の、ICBM への直接的な技術転用が比較的容易だったそれまでのアメリカの宇宙開発計画とは全く性質が異なった。

アポロ計画には、宇宙空間における宇宙船同士のドッキングやランデブーといった極めて複雑な航行技術だけでなく、最新の電子工学や医学、生理学、通信技術、宇宙飛行士のための船内環境制御技術等、ICBM を開発する上では必要とされない科学・技術が多用された。確かに、アポロ計画に用いられた大型ブースター、あるいは目標物への誘導などの技術は、間接的ではあるが、ICBM 等の軍事的転用が可能なものである⁽¹⁰⁾。だが、アポロ計画が開始される以前の 1959 年には、すでにアメリカ空軍主導のもと ICBM のアトラス D・ミサイルが完成しており、実戦配備されていた⁽¹¹⁾。また、アポロ計画に用いられたサターン V・ロケットには酸化剤として極低温の液体酸素が用いられていたが、これは長期に渡って内部タンクに貯蔵しておくことが可能なものではなかった⁽¹²⁾。そのため発射の際には数日に渡る準備が必要であり、即応性が求められる ICBM として転用するには甚だ不適當なものだった。そして何よりも、ICBM を開発するのであればアポロ計画に費やされた 240 億ドルをその開発に直接充てるべきだったといえるだろう。つまり、人類を月に送り込むという計画には費用に見合うだけの直接的な軍事的効果は無く、合衆国政府の意図は他にあったと考えざるを得ない。では、アメリカはアポロ計画を遂行することによって一体何を手にしようとするのか、またどのようにしてケネディはこの計画の必要性を議会と国民に訴えかけたのか。

これまでも複数のジャーナリストや研究者が、ケネディによるアポロ計画決定の経緯について取り上げている。例えば、現 NASA 諮問委員会のメンバーで、ジョージ・ワシントン大学宇宙政策研究所所長のジョン・M・ログスドン（John

M. Logsdon) は、ガガーリンの飛行直後に開かれた NASA 高官たちを集めた会議の中で、どのようにしてケネディがアメリカの有人月面着陸計画を決定するに至ったのかを詳細に示した⁽¹³⁾。また、ペンシルバニア大学のウォルター・A・マクドゥガル (Walter A. McDougall) は、政治、軍事、産業界が一体となったダイナミズムがいかにしてアポロ計画を生み出し、その計画が推進されていったのかを、緻密な資料分析を通して明らかにしている⁽¹⁴⁾。

しかし、上掲書を含めたこれまでの研究では、ケネディによる 1961 年 5 月 25 日の特別議会演説と、1962 年 9 月 12 日に行われたライス大学における演説の両者については一部が引用されるにとどまっており、その内容を集中的に扱い、分析されることはなかった。そこで本稿では、これら二つの演説を通してケネディがいかに議会と国民を説得したのかを分析し、これまでにあまり顧みられることのなかった、アポロ計画のある一つの側面に僅かなりとも迫ることを目的とする。その側面とはすなわち、アポロ計画は「アメリカはいかにして世界と関わるべきなのか」という極めてアメリカ的な問への、一つの「現実的な」答えだったということである。

あらかじめ結論を述べる。特別議会演説において、ケネディは、ソヴィエトに先駆けてアメリカが有人月面着陸を成功させることが即ち西側陣営の象徴たる「自由」の勝利を意味するという構図を提示することで、アポロ計画実行についての議会の賛同、即ち予算の承認を得ることに成功した。アポロ計画が既に動き始めていた 1962 年のライス大学における演説では、「科学・技術」大国としてのアメリカの国家的アイデンティティーに訴えかけ、アポロ計画をアメリカの信念とヴィジョンの証とした。アメリカは月を目指すことで、世界に対し、自由と科学・技術の指導者というイメージを確固たるものにしようとしたのである。

Ⅱ．特別議会演説

1961 年 5 月 25 日、ケネディは『国家的緊急課題に関する特別議会演説 (Special Message to the Congress on Urgent National Need)』と題した 45 分に及ぶ演説の末

部で、有人月面着陸計画を議会に提示した。まずは、彼がどのような文脈で計画の必要性を説いたのかを概観したい。

ケネディはこの演説の冒頭において、アメリカにはその信念と強大さゆえ「自由という大義」における指導者としての役割が課されており、歴史上これほど困難で重要な役割はない、と主張した。ケネディがこの演説で掲げたのは「フリーダム・ドクトリン (freedom doctrine)」である。曰く、アジアやラテンアメリカ、アフリカや中東で自由を求める革命が沸き起こっており、アメリカは全世界における自由の確立を達成すべく、「不正義 (injustice)」、「暴政 (tyranny)」、「自由の敵対者 (adversaries of freedom)」との戦いに勝利しなければならない。彼らは扇動者や技術者、プロパガンダを紛争地に送り込み、ゲリラや暗殺、破壊分子や妨害工作などの恐るべき手段で、「この 60 年代が終わる前に」世界の最も新しい国々の希望を打ち砕こうとしている。

ここでは、特定の地域や国を対象とした具体的な軍事行動の必要性が示されたわけではなかったことに注意したい。ケネディは、この「自由対暴政の戦い」を武力と暴力、生命と領土のための戦いであると同様、「意志と目的」および「精神と魂」の戦いであると述べ、アメリカの役割について次のように言及した。我々は、この国の始まりからそうであったように、すべての国の独立と平等のために戦ってきた。この国は革命から生まれ、自由の中で育まれてきた。それゆえ、世界各地で自由が脅かされているこの状況を看過することはできない⁽¹⁵⁾。

この戦いに勝利を収めるべく、ケネディは 45 分に及ぶ演説の中で様々な政策を提示した。第一に国内の経済・社会成長、第二に国外における経済・社会成長、第三に自衛のためのパートナーシップ、第四に軍事及び諜報による国防、第五に民間防衛、第六に軍備縮小、そして最後に彼が示したものが米による有人月面着陸計画だった。

ケネディは、月へ宇宙飛行士を送り込むという宇宙計画について「もし我々が、現在世界で繰り広げられている自由と暴政の間の戦いに勝利しようとするのであれば」と切り出した。そして、ガガーリンによる人類初の有人宇宙飛行が、1959

年のスプートニクの打ち上げと同様に「どちらの道を進むべきか決定を下そうとしている人々」に大きな衝撃を与えたと続けた⁽¹⁶⁾。

この発言が意味するのは、アポロ計画は、世界各地の新興国において危機に瀕しているとアメリカが見做すところの自由と独立、革命に力を与え、それらの国々から東側陣営の脅威を取り除くための一手段として議会に示されたということである。1959年にはチベット蜂起やラオス戒厳令、ベルギー領コンゴでの動乱、続く1960年にはナイジェリアやモーリタニアなどアフリカで相次いで独立運動が起こり、さらに南ベトナム開放民族戦線が結成された。加えて、演説直前の1961年4月には、アメリカが支援する反革命傭兵軍がキューバ革命政権の打倒を狙ったピッグス湾事件が起きている。これらの国々は、政情が不安定であるがゆえ、東西陣営のどちらにつくのが未だ不確定だった。彼らこそが、ケネディの述べる「どちらの道を進むべきか決定を下そうとしている人々」だった。

ジョンソンがケネディに宛てたメモで指摘したとおり、宇宙開発において劇的な成果を上げることはその国の世界における覇権を示すひとつの指標となりつつあった⁽¹⁷⁾。つまり、いかにそれらの国々が「アメリカの理想主義的な価値に感謝」していようと、ソヴィエトの宇宙における成功は彼ら新興国をしてアメリカに対する評価を下げさしめ、結果、東側陣営の拡大を招くことに繋がりがねなかったのである。事実、当時マサチューセッツ工科大学学長でケネディの科学顧問を務めていたジェローム・B・ワイズナー (Jerome B. Weisner) は、ソヴィエトの宇宙における優位が国際関係におけるアメリカの地位を大いに弱化させたとケネディが確信していたことを記している⁽¹⁸⁾。

それゆえケネディは、合衆国は「1960年代が終わるまでに」人間を月面に送り無事に地球へ帰還させるという目的を達成させることに専念すべきである、と宣言した⁽¹⁹⁾。ケネディがこの演説の冒頭で、自由の敵対者らが「1960年代が終わる前に」世界各地の独立運動の破壊を目論んでいると述べたのは、アポロ計画提示のためのいわば伏線だったと見るのが妥当であろう。

ケネディは、この計画の実行の賛否を「我々がひとつの国家として下す決断の

中で最も重要なもののひとつである」としつつ、こう続けた。もし合衆国が月に宇宙飛行士を送り込むという目標を志半ばにして諦めるか、あるいはその達成を叶えられないのであれば、むしろ月を目指すべきではない⁽²⁰⁾。

しかしそう言いながらも、ケネディは、合衆国の国家としての強みを示すことで議会を鼓舞した。彼が強みとして挙げた第一の「単純な事実」とは、アメリカが自由の側に立っているということだった。歴史が始まって以来、特に第二次大戦以降、自由は常に地球上で勝利を収めてきている、とケネディは主張した。そして、彼は合衆国が結ぶ西側諸国との同盟について、さらにアメリカの平和への望みを挙げた。彼が最後に提示したのは、アメリカ人及び彼らの意志だった。その意志とは、将来の指導者になるために他国から我が国を訪れる者たちに対し友情を示そうとするアメリカ人の意志であり、合衆国のイメージが肯定的で前向きのものであって欲しいと願う意志である⁽²¹⁾。

アポロ計画の承認を議会に求める際にケネディが用いた論法とは、「自由という大義」の下、アメリカ人を月に送り、そこに自由の旗を立てることで「自由の敵対者」からの独立を求める人々に革命や諸国の平等などのいわばアメリカ的理念を示し、彼らを西側陣営へ引き込むというものだった。ケネディが合衆国の強みとしてアメリカ人とその意志を挙げたのは、ひとえにこの計画が、世界におけるアメリカのイメージを「肯定的で前向きなもの」にするために実行されたからに他ならない。この特別議会演説はフリーダム・ドクトリンの名を借りたアポロ計画のための演説だった。

Ⅲ. ライス大学における演説

アポロ計画始動後の1962年9月12日、ケネディはライス大学のフットボール競技場でアポロ計画についての一般向け演説を行い、聴衆からの熱狂的ともいえる反応を得た。ケネディの用いた言葉は平易なものであり、かつ聴衆の愛国心や探究心、向上心、あるいは恐怖心などに訴えかけるものとなっていた。上で概観した特別議会演説のテーマが「自由」だったとするならば、ライス大学でのそれ

は「最初／一番であること (to be first)」だった。以下にこの演説の流れを示したい。

はじめにケネディは、人類がこれまでに直線的な進歩と発展を遂げてきていると述べた。彼は次のように語った。世界の文明の流れを5万年に縮めると、キリスト教が誕生したのが2年前、電球や電話が発明されたのは先月、ペニシリンやテレビ、核技術は先週であり、今日の真夜中ついにアメリカの探査機が金星に到着する。この進歩はあまりに速かったがゆえ、我々のうちに今しばらくこの場所に留まろうとする者がいても驚くにはあたらない。だが、このヒューストンという街、テキサスという州、そしてアメリカ合衆国というこの国は、そのような者らによって建てられたのではない。この国は前に進む者たちによって建てられた。宇宙もまたそのようになる⁽²²⁾。

ケネディは続ける。この進歩の歴史は、人類には知識と進歩の探求において前進し続けることが定められており、遅延は許されない、と我々に教えるものである。他国のリーダーになることを望む国であれば、宇宙における競争で遅れを取ることはできない。アメリカは産業革命の最初の波に、近代発明の最初の波に、そして核の力の最初の波に乗ってきた。ゆえに、我々の世代は来るべき宇宙時代の後波に飲み込まれ、沈降してはならない⁽²³⁾。

このようにケネディは、重複を恐れず「最初の波」を三度も繰り返すことで、アメリカという国家がこれまで産業、工業、科学、技術の側面で常に世界を導いてきたことを強調した。事実アメリカにおいては、「金びか時代」と呼ばれた19世紀後半以降、産業革命によって都市化、工業化、インフラストラクチャーの整備、普及が劇的に進んだ。合衆国は1913年までには世界工業生産の3分の1以上を生産する世界最大の経済大国になり、1950年代には世界で最も早く大量消費社会が訪れた⁽²⁴⁾。

注目すべきは、ケネディのこの発言に、合衆国には世界を導く役割が課されているがゆえに、今後も人類の進歩と発展の最先端を走り続けなければならないのだという使命感が見られることである。これは、議会演説で盛んに強調された「自

由という大義」におけるリーダーシップに相通じる使命感である。だが、このライス大学の演説において、その使命感の中心をなす概念は「自由」よりもむしろ、アメリカの持つ「科学・技術、および産業・工業力」により大きな比重が置かれていた。事実、この演説で「自由」という言葉がケネディの口から発せられたのは以下に示す一度のみである。

今や、世界の目は宇宙や月、その先にある惑星に注がれており、我々はそれが敵対的な征服の旗ではなく、「自由と平和 (freedom and peace)」の旗で統治されることを、そしてこの宇宙が大量破壊兵器ではなく、知識と理解のための装置で満たされることを誓った。だが、この誓いはアメリカが一番になって初めて満たされるものであり、それゆえ、我々は一番を目指す。宇宙のための科学は、核科学や他の全ての技術同様、それ自体は良心を持たず、善のための力となるか悪に利用されるかは人間にかかっている。我が国が宇宙において優位に立たなければ、我々はこの新しい大洋が平和の海となるか、あるいは恐るべき戦場となるかを決定することができない⁽²⁵⁾。

このくだりは、宇宙開発においてソヴィエトに先行を許すことへの恐怖心がアメリカ国内においていかに強かったかを示すものである。ケネディは、その恐怖心に訴えかけ、宇宙開発はソヴィエトではなくアメリカによって先導されるべきであり、宇宙と、ひいては地球の平和のために、アメリカは月への一番乗りを目指すのだと主張した。

その後、演説は最大の盛り上がりを迎える。ケネディは、アポロ計画がICBMの開発など、戦略的な実利を目的としたものではないことを逆手にとり、月に行くという行為は、人間の向上心や探究心の表れとして価値があるのだとアピールする。「だが、なぜ月なのかと問う人もいる。なぜこれ为目标とするのだろうか。彼らは、続けてこう問うかもしれない。なぜ最も高い山に登るのか。なぜ35年前、大西洋を飛んだのか。なぜライス大学はテキサス大学と競い合うのか。」この言葉に、聴衆の興奮は頂点に達する。そして会場の盛り上がりを利用し、「我々は月に行くことを選択する (We choose to go to the moon.)」と、ケネディは効

果的な間を置いて三度繰り返した⁽²⁶⁾。

「選択する」という動詞は、合衆国の代弁者、ケネディの意志と、月に行くという目標を達成するに足る能力が我々には備わっている、という彼らアメリカ人たちの自負の大きさを示すものであるといえる。「我々はこの 60 年代が終わる前に月へ行く。それが容易ではなく困難であるがゆえに。その目標により我々の力と技術の粋は一つに集められ、その目標はそれらを評価する助けになるがゆえに。また、その挑戦は、我々が受け入れること欲し、延期することを厭うところのものであるがゆえに。そして我々が、その挑戦に勝つつもりであるがゆえに⁽²⁷⁾。」

さらにケネディは、月に「どのような利益が我々を待ち構えているかは分からない⁽²⁸⁾」としながらも、その遂行には極めて高度な科学・技術が要求されることを以下のように示し、聴衆に覚悟と奮起を促した。「ヒューストンの管制局から 24 万マイル離れた月へ、このフットボール・コートと同じ長さである 300 フィートを超え、まだ発明されていない新しい合金を用い、これまでに経験してきた数倍の熱とストレスに耐え、最も精巧な時計の精密さを以って組み上げられ、噴射、誘導、制御、通信、食料と生存に必要な全ての装置を運ぶ巨大なロケットを、これまでに試されることのなかったミッションで未知の天体へ送り込み、そしてそれを時速 2 万 5 千マイルを超える速さで、太陽温度の半分もの熱を発生させながら安全に大気圏へ再突入させるのであれば、しかもそれを 60 年代が終わる前に、適切に、しかも一番にやり遂げるというのであれば、我々は勇敢にならなければならない⁽²⁹⁾。」

このように、ライス大学の演説において示された使命感は「自由という大義」におけるものというよりも、むしろ「科学・技術の粋たる宇宙探査」において指導的な役割を果たさなければならない、というものであった。それは、ジョンソンが指摘したとおり、「宇宙開発において劇的な成果を上げることが、その国の世界における覇権を示すひとつの指標⁽³⁰⁾」となっていたからである。世界初の月面着陸を成功させることは、ソヴィエトの宇宙における膨張を防ぐだけではなく、世界の指導者としてのアメリカの資質を十分に示すものでもあった。

IV. 終わりに

ケネディは、1961年の特別議会演説において、「自由」という側面からアポロ計画の承認を目指した。彼は、アメリカは歴史の上で常に勝利を収めてきた「自由」の側に立っており、我々には「自由という大義」における指導者としての役割が課されているとした。ゆえに、アメリカが「自由と暴政の間の戦い」に敗北することは、独立を求めて戦う世界の新興国の希望を打ち砕くことになる、と論じた。合衆国は何らかの方法で宇宙におけるソヴィエトに対する優位を示し、「長期的に見た際の勝者」になる必要があった。その方法が、宇宙飛行士を月に送るというものだった。

また、1962年のライス大学における演説では、ケネディはアメリカを「科学・技術」において指導的役割を担うべき国家であるとした。「最初／一番であること」がことさら強調されたのは、自由だけではなく、科学・技術の点においても世界を導き続けることがアメリカの国家的アイデンティティーだとされたからである。さらにケネディは、ソヴィエトとの間に展開された宇宙開発競争において勝利を収めなければ、宇宙と地球の平和を保つことが困難であると述べた。ここにはアメリカが自己を正当化しようとする意図が見え隠れしている。また同時に、ソヴィエトの手から世界を救うことはアメリカの存在意義でもあったといえる。

これら二つのアメリカの国家的アイデンティティー、「自由」あるいは「科学・技術」の指導者という自己像は、1960年代初頭、ソヴィエトが宇宙において圧倒的な優位に立っていたために、未曾有の危機にさらされていた。ソヴィエトはあらゆる側面から見てアメリカの存在意義への挑戦と捉えられた。つまり、アメリカが240億ドルを費やし宇宙飛行士を月に送ることを通して手に入れようとしたものは、世界から指導者として認識されること、そしてそれによって自由あるいは科学・技術の指導者としての自己像を回復することにあった。その意味において、ケネディが自ら述べたとおり、アポロ計画はあらゆる側面で世界を導かんとする国家としての「信念とヴィジョンの証⁽³¹⁾」だったと言える。

Notes

- (1) 本稿は2012年6月2日に名古屋大学で行われた第46回アメリカ学会における筆者の発表「アポロ計画と『自由という大義』におけるアメリカのリーダーシップ」をもとに書かれている。
- (2) “Soviet Fires Earth Satellite into Space; It Is Circling the Globe at 18,000 M.P.H.; Sphere Tracked in 4 Crossings over U.S.,” *New York Times*, October 5, 1957; “Device Is 8 Times Heavier than One Planed by US,” *Ibid.*, 1, 3; Walter Sullivan, “Course Recorded: Navy Picks Up Radio Signals,” *Ibid.*, 1, 3; William J. Jordan, “560 Miles High: Visible with Simple Binoculars, Moscow Statement Says,” *Ibid.*, 1, 3; Matthew Brzezinski, *Red Moon Rising: Sputnik and the Hidden Rivalries That Ignited the Space Age* (New York: Henry Holt and Company, 2007), 171-172.
- (3) “Why Did the U.S. Lose the Race? Critics Speak up,” *Life*, October 21, 1957, 22-23.
- (4) See, for instance, Barbara Barksdale Clowse, *Brainpower for the Cold War: The Sputnik Crisis and National Defense Education Act of 1958* (Westport, Connecticut and London, England: Greenwood Press, 1981), 17; Paul Dickson, *Sputnik: The Shock of the Century* (New York: Berkley Books, 2003), 4, 151; Curtis Peebles, *Watch the Skies! : A Chronicle of the Flying Saucer Myth* (New York: The Berkley Publishing Group, 1995), 142.
- (5) “Soviet Orbits Man and Recovers Him; Space Pioneers Reports: ‘I Feel Well’; Sent Messages while Circling Earth,” *New York Times*, April 12, 1961, 1, 22.
- (6) “Russian Success Hailed by World; British Scientist Says Soviet is ‘About 3 Years’ Ahead of U.S. in Technology,” *New York Times*, April 13, 1961, 15.
- (7) John M. Logsdon, “The JFK Decision,” *Newsday*, July 12, 1969, 3W.
- (8) Lyndon B. Johnson, Memorandum for the President, “Evaluation of Space Program,” April 28, 1961, NASA Historical Reference Collection, Folder 012506, 2.
- (9) Andrew Chaikin, “Live from the Moon: the Societal Impact of Apollo,” *Societal Impact of Spaceflight*, Steven J. Dick and Roger D. Launius, ed. (Washington, DC: National Aeronautics and Space Administration Office of External Relations History Division, 2007), 56; Andrew Smith, *Moondust: In Search of the Men Who Fell to Earth* (London: Bloomsbury, 2006), 212.
- (10) Walter A. McDougall, *...the Heavens and the Earth: A Political History of the Space Age* (New York: Basic Books, Inc., Publishers, 1985), 393.
- (11) Donald Mackenzie, *Inventing Accuracy: A Historical Sociology of Nuclear Missile Guidance* (Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1993), 428.

- (12) Ray A. Williamson, "The Biggest of Them All: Reconsidering the Saturn V," *To Reach the High Frontier: A History of U.S. Launch Vehicles*, Roger D. Launius and Dennis R. Jenkins ed. (Lexington, Kentucky: The University of Kentucky, 2002), 319.
- (13) Logsdon, "The JFK Decision."
- (14) McDougall, *...the Heavens and the Earth: A Political History of the Space Age*.
- (15) John F. Kennedy, *Special Message to the Congress on Urgent National Needs*, Delivered in person before a joint session of Congress on May 25, 1961, 2. <http://www.jfklibrary.org/Research/Ready-Reference/JFK-Speeches/Special-Message-to-the-Congress-on-Urgent-National-Needs-May-25-1961.aspx> (retrieved on November 30, 2013)
- (16) Ibid.
- (17) Johnson, *Evaluation of Space Program*, 2.
- (18) Jerome B. Weisner, *Where Science and Politics Meet* (New York: McGraw-Hill, 1964), 8-9.
- (19) Kennedy, *Special Message to the Congress on Urgent National Needs*.
- (20) Ibid.
- (21) Ibid.
- (22) John F. Kennedy, *Address at Rice University on the Nation's Space Effort, September 12, 1962*. <http://er.jsc.nasa.gov/seh/ricetalk.htm> (retrieved on November 30, 2013)
- (23) Ibid.
- (24) 拙稿「"Manifest Destiny" の 20 世紀的展開——スプートニク危機とアポロ計画——」『ICU 比較文化』第 42 号（国際基督教大学比較文化研究会、2010 年）所収、1-35 頁。
- (25) Kennedy, *Address at Rice University on the Nation's Space Effort*.
- (26) Ibid.
- (27) Ibid.
- (28) Ibid.
- (29) Ibid.
- (30) Johnson, "Evaluation of Space Program," 2.
- (31) Kennedy, *Address at Rice University on the Nation's Space Effort*.

参考文献一覧

< 一次文献 >

- Johnson, Lyndon B.. Memorandum for the President. "Evaluation of Space Program." April 28, 1961. NASA Historical Reference Collection. Folder 012506.
- Kennedy, John F.. Special Message to the Congress on Urgent National Needs. Delivered in person before a joint session of Congress on May 25, 1961. <http://www.jfklibrary.org/Research/Ready-Reference/JFK-Speeches/Special-Message-to-the-Congress-on-Urgent-National-Needs-May-25-1961.aspx> (retrieved on November 30, 2013)
- . *Address at Rice University on the Nation's Space Effort, September 12, 1962*. <http://er.jsc.nasa.gov/seh/ricetalk.htm> (retrieved on April 2, 2012)

< 二次文献 >

- Brzezinski, Matthew. *Red Moon Rising: Sputnik and the Hidden Rivalries That Ignited the Space Age*. New York: Henry Holt and Company, 2007.
- Chaikin, Andrew. "Live from the Moon: the Societal Impact of Apollo." *Societal Impact of Spaceflight*. Steven J. Dick and Roger D. Launius, ed.. Washington, DC: National Aeronautics and Space Administration Office of External Relations History Division, 2007.
- Clowse, Barbara Barksdale. *Brainpower for the Cold War: The Sputnik Crisis and National Defense Education Act of 1958*. Westport, Connecticut and London, England: Greenwood Press, 1981.
- Dickson, Paul. *Sputnik: The Shock of the Century*. New York: Berkley Books, 2003.
- Logsdon, John M.. "The JFK Decision." *Newsday*. July 12, 1969.
- Mackenzie, Donald. *Inventing Accuracy: A Historical Sociology of Nuclear Missile Guidance*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1993.
- McDougall, Walter A.. *...the Heavens and the Earth: A Political History of the Space Age*. New York: Basic Books, Inc., Publishers, 1985.
- Peebles, Curtis. *Watch the Skies! : A Chronicle of the Flying Saucer Myth*. New York: The Berkley Publishing Group, 1995.
- Smith, Andrew. *Moondust: In Search of the Men Who Fell to Earth*. London: Bloomsbury, 2006.
- Wiesner, Jerome B.. *Where Science and Politics Meet*. New York: McGraw-Hill, 1964.
- Williamson, Ray A.. "The Biggest of Them All: Reconsidering the Saturn V." *To Reach the High Frontier: A History of U.S. Launch Vehicles*. Roger D. Launius and Dennis R. Jenkins ed.. Lexington, Kentucky: The University of Kentucky, 2002.
- 青砥吉隆 「“Manifest Destiny” の 20 世紀の展開——スプートニク危機とアポロ計画——」 (国際基督教大学比較文化研究会編『ICU 比較文化』第 42 号所収)、国際基督教大

学比較文化研究会、2010 年。

< その他の資料 >

Life, October 21, 1957.

New York Times, October 5, 1957.

———, April 12, 1961.

———, April 13, 1961.

The Act of Faith and Vision: Analysis of Two “Moon” Speeches Made by John F. Kennedy

AOTO, Yoshitaka

This study aims to highlight an aspect of the Apollo Program that has rarely been studied. The space program was a realistic answer to the very American question: “how should the United States commit to the rest of the world?” Through analyzing two speeches made by President Kennedy regarding sending astronauts to the moon, the author tries to illustrate the untold purpose of the space program and the way in which the president convinced Congress and American people.

On May 25, 1961, Kennedy made a speech titled “the Special Message to the Congress on Urgent National Needs” in order to start up a space program that aimed to send men to the moon and return them safely to Earth. Kennedy declared the “Freedom Doctrine” in this speech. By claiming that American strength and conviction imposed upon the nation the role of leader in freedom’s cause, the president sought to persuade Congress to approve the program. He was firmly convinced that the Soviet supremacy in space, such as Sputnik-1 and the first manned flight by Gagarin, had greatly weakened the United States in foreign affairs. America must have achieved a prominent victory in space in order to win the battle on Earth between “Freedom and Tyranny.”

In a speech at Rice University on September 12, 1962, Kennedy stated that the United States should have a leading role in science and technology, and emphasized that the nation must win the space race by being “first.” He believed that science and technology, as well as Freedom, were aspects of American

national identity. In addition, the president mentioned that it was difficult to keep space peaceful unless the United States won the race against the Soviet Union. To be the first nation to land men on the moon meant not only preventing the Russians from extending their power in space, but also showing off their ability to lead the world in every way.

Freedom and scientific technologies, the national identity of the United States, were severely threatened in the early 1960s because of the overwhelming superiority of the Soviet Union in space achievement. Under these very harsh circumstances, the United States regarded their rival as a formidable challenge to the American *raison d'être* as the world's most advanced country. By spending 24 billion dollars and successfully conducting the space program, the United States tried to restore their image as the world's leader in freedom's cause and scientific technologies. As Kennedy himself articulated, the Apollo Program was an "act of faith and vision."